



見えてきたもの

川添 透和（佐賀県・中学3年）

その1球で、僕は左目の視力を失った。県大会3日前のことだった。

中学校へ入学し、小学校から野球をしていた僕は迷わず野球部に入部した。先輩のプレーを見て、小学校とは違うレベルの高さに憧れを感じた。当時中学校では、校舎の建て替えのためグラウンドが使えず、授業が終わると玉島小学校まで毎日練習に通った。短い時間の中、濃密なメニューで練習する日々が続いた。

そして先輩達が引退した1年前の夏、僕はキャプテンに指名された。実力のない僕に、母は猛反対した。僕自身も重圧を感じ、毎日胃の痛い思いをしたほどだ。しかし仲間を支えられ、何とかその役目を務めてこられた。

今年（当時）の7月、いよいよ最後の大会となる中体連に向け、僕達は必死に練習に励んだ。これまでの試合でなかなか満足のいく結果をだせずにいたので、今まで指導してくれた先生や全力でサポートしてくれた家族に何とか恩返しをしたい、そしてこの仲間と1日でも長く野球がしたいという思いが募っていた。

地区大会が始まり、僕達は1試合1試合、今まで以上に集中してプレーした。そして地区大会優勝。県大会に向け更に力が入った。

次の目標は九州大会。県大会に勝って九州大会に行きたいという気持ちが強くなっていた。部活が終わってからも毎日自主練習をした。「打ちたい」「結果を出したい」そんな思いだった。バッティング練習を頑張っていたその時だった。自打球が僕の左目を直撃してしまった。一瞬の事だった。翌日病院に行くと、左目の視力がなかった。

県大会の前日、チームメイトに目の状態と試合に出られないことを報告した。号泣してくれる仲間がそこにいた。緊急手術は免れ、何とかベンチに入れてもらった。キャプテンとして僕にできることは、ベンチサポートしかなかった。それまで当然のように試合に出させてもらっていた僕は、ベンチで控えている仲間の気持ちや、プレーを支える事の大切さが見えていなかった。ベンチで過ごして、初めてその事に気付いた。プレーする選手もベンチもみんな本当に全力だった。そして僕たちは、県大会の頂点に立つことができた。

九州大会では、延長・特別ルール末、惜敗を喫したが、とてもよい経験ができた。この大会で僕は改めて仲間の絆を強く感じた。

眼球の腫れが引けば治ると言われていたが、1週間後の検査でも変化はなかった。2週間後も、1か月後も結果は同じだった。ついには黄斑損傷と虹彩損傷で回復の見込みが難しいことを告げられた。

僕の生活は、今までと違うものになった。まず、遠近感がない。キャッチボールをしてもボールを掴めない。字を書く位置がわからない。階段が怖い。そして何より日光が痛い。外見は以前と何も変わっていないので、僕の左目が失明した事を知らない友だちも多い。

小学校の頃、目にアイマスクをして目が見えないことや、車椅子に乗ったりして体験学習をしたが、その時怖いと感じたのは一瞬だった。わかったつもりになっていたが、こんなに大変だったとは……。

失明をしたことで、今まで見えていなかった色々なことが見えてきた。仲間や先生と助け合い、支え合い、高め合いながら野球ができていたこと。家族や保護者さんに温かく見守られていたこと。こんなに恵まれた環境の中で不自由なく生活していたこと。

この先苦勞をすることも出てくるとは思うが、泣いても、悔やんでも、落ち込んでも治らないのなら、前向きにこの現実を受け止めなければいけないと思う。今僕は、この試練を糧に見えない未来を見ようとしている。人の為にも伝えていけることがあればいいなど考えている。そして僕はこれからも野球を続けていくつもりだ。



ひよこの帽子

光宗 樹生（香川県・中学2年）

僕は、脳の血管に少し異常があります。そのため自分の行動をコントロールできないことが多く、小学校のとき、たくさん悪口を言われました。何とかしようと思いましたが、自分の暴走を止めることができませんでした。

心療内科に行って、薬をもらいました。迷惑をかけているクラスみんなのためにも、薬をのもうと思いました。朝3錠、晩1錠。でもあまり効果はありませんでした。薬を飲むと何も食べたくなくなり、僕の体は大きくなりませんでした。

体調をくずして休んでも、宿題や連絡をもってきてくれる人はいません。遊ぶ友達もいませんでした。たまに遊ぶ約束をしても、約束したところに行くと誰もいない。僕は人と接することを避けるようになっていました。接すると相手を傷つけ、自分も傷ついてしまうのです。

そんな僕が、自分らしく生きはじめたのは、中学でボランティア部に入り、「朝ボラ」をはじめたときです。「朝ボラ」とは、朝早く来て学校前の道や溝を掃除するボランティアです。小学校時代、みんなどうまくいかなかった僕は、誰よりも早く学校に来て、みんなが登校する道をきれいにしておこうと思いました。毎朝7時までに学校に来て、約30分間掃除することにしました。

「朝ボラ」をつづけているうち、僕はどんどん変わっていききました。人を避けていた僕が、道を通る人に自然にあいさつできるようになり、集中して掃除するので集中力もついてきました。クラスでも自分からあいさつしたり話しかけたりできるようになり、みんなからも話しかけられるようになりました。

朝は暗いときもあるので、安全のため、先生が「黄色いひよこの帽子」をくれました。「黄色いひよこの帽子」をかぶって掃除していると、通勤する自衛隊さんの目にとまり、「毎朝早く掃除しているひよこ君を見て、元気をもらっている。」と評判になり、新聞に取り上げられたりもしました。

「朝ボラ」をつづけて1年8ヶ月。8人の部員と掃除する道には、いつも明るいあいさつと笑顔があふれています。ポイ捨てごみもほとんどなくなり、道もきれいになりました。僕は、ひとりぼっちではなくなりました。

部では、元ハンセン病の詩人、塔和子さんの詩を紹介する活動もしていますが、その塔さんの詩にこんな一節があります。「多くを背負わなかったら私はなかった」。僕もつらい時代があったからこそ、「朝ボラ」をつづけられ、今の自分になれたと感じています。たとえ人と違うところや病気、障害があったとしても、それこそをジャンプ台にして、飛べるのです。

これからも「ひよこの帽子」は、みんなの道を明るく照らします。

優秀賞



自分ができる事を楽しみながら

保科 怜里（石川県・中学校2年）

2017年は、私がボランティア活動を始めた年となった。そして、ボランティアに対する意識が変わった年ともなった。ボランティアというと、大がかりで、ハードルが高く、気軽にできるものではないというイメージがそれまでの私の中にあった。それで、ボランティアをしている人は偉いなあと感じながら、一方で私には何ができるのだろうかという負い目みたいなものをいつも感じていた。しかし、ある機会によって、私のボランティアに対するイメージは大きく変わり、こんな私にもボランティアができるのだということが分かった。

私は金沢の伝統芸能である狂言を習う団体に所属している。たまたま高齢者福祉施設の方から声が掛かり、仲間5人で狂言を披露することとなった。発表中は施設の観客から何度も笑いがおこり、演じている私にも楽しんでもらっている感じが伝わってきた。そして演じ終わると大きな拍手をもらい、「楽しかった」「元気が出てきた」「上手だった」などたくさん感想をもらえた。私は狂言が好きだから狂言を習っていて、たまたま披露しただけ。まさか他人を楽しませたり、元気にすることができるとは思ってもいなかった。その時私にもボランティアはできるんだという喜びと、心が爽やかになる感覚を味わった。そしてもっとボランティアをしたいと思った。

それで私は「ボランティア・アクション in 福島」のプログラムに参加することに決めた。北陸新幹線、東北新幹線を乗り継いでの1人旅。初めて訪れる福島。緊張しながら向かったけど現地に着くと、今日会ったとは思えないくらいにすぐにみんなと打ち解けた。

現地でのボランティア活動は主に2つで、復興住宅を訪問して食事を提供することと、高齢者福祉生活センターでの清掃やレクリエーションだった。食事提供は250人分の食事を班ごとで作る。初めて経験する量の多さでびっくりしたけど、作っている最中も楽しく、あつという間に感じた。復興住宅の人達と一緒に食事をして「おいしかった」「ありがとう」と言われた時は、うれしかったなあ。翌日の高齢者福祉センターでの窓ふきは、汚れが落ちてきれいな窓になった時は、心も清々しくなったし、レクリエーションの輪投げは施設の入居者の方達と盛り上がった。いろんな会話もして「楽しかった」「また来てね」と言葉を掛けてもらったけど、私こそ楽しかったし、また来たいと思った。不思議なことに、この5泊6日の福島でのプログラム中、私はボランティア活動をしていて、ボランティアをしたという感覚はなく、結果的にボランティア活動をしていたと言ってもいいくらいだった。大量の食事提供も清掃活動も本当ならば大変な作業だ。けれど大変だとは全く思わず、むしろ楽しい、うれしいという気持ちしか湧かなかった。私は何故だか考えてみた。それは仲間がいたから、そして、喜んでもらえていることが感じられたからだと思う。さらに1番の理由は、私自身が楽しんでいたからではないだろうか。

ボランティアとは何か？あらためて自分に問いかけてみた。狂言の発表も福島での活動もとにかく相手も自分もみんなと一緒に楽しんでいた。だからボランティアとは、何かをしてあげるのではなく、一緒に楽しむ事なんだと。だから本当はボランティアとは誰でも気軽にできるものなのだと思う。こうしてみんながそれぞれ優しさや思いやりを持って自分がまずできる事をして、一緒に楽しめば、多分、優しく、明るい、社会になるはずだ。さらには世界も平和になるかもしれない。

そんな私は今も金沢の施設などで狂言の発表をしている。自分ができる事を自分も楽しみながら。これからも続けていこうと思う。

優秀賞



今年こそ

山根 加蓮（島根県・高校1年）

自分の話したくない過去について考えてみると沢山ありますが、それを話すということはとても勇気がいります。話したことで距離をおかれてしまうかもしれないと思うと怖くて、今まで隠して生きてきました。今日は、私の経験が同じように悩んでいる人たちのこれからの選択肢のひとつになったらいいなと思い話します。

現在、私は高校1年生です。しかし、実は留年しているので歳は17歳です。高校で留年する人は少数だと思います。私は、進級できないと分かったとき、留年か退学かとても悩みました。留年についてのネットの書き込みは否定的なものばかりで不安になりましたが、私は留年することを決めました。その理由は2つあります。

1つ目は、精神科の病院でお世話になった看護師さんのように、相手の心に寄り添い、ケアをする仕事に就きたいからです。私は中学1年生の頃、人間関係の悩みを多く抱えていました。周囲に相談しても理解してもらえず、人間不信と摂食障害で不登校になり、自殺未遂を繰り返していました。もともと、感情が表に出やすい性格だったのですが、「気を引くために泣いてるんでしょ。」と言われてから、自分の気持ちを表に出すのが怖くなり、ふさぎ込んでいました。しかし、入院治療中、看護師さんが私のペースに合わせて接してくださったことで、徐々に心がほぐれてききました。そして、段々と周囲の患者さんとも話せるようになりました。いろんな方と関わる中で、考え方は1つでないことに気づき、もう1度頑張ろうと思えるようになりました。当時の入院仲間とのつながりは、私の大切なものです。

2つ目は、自分の可能性を自分でなくしたくなかったからです。高校では自分を変えようと思っていたのですが、まともに中学校に通えていなかった私にとって、毎日通うというのはハードルが高いものでした。人の視線が怖く大人数の輪の中に入るのが苦手なので、休み時間はトイレで泣いていました。母には「あんたなんか産まなきゃ良かった。」と言われました。親に存在を否定されることは、他の誰に否定されるよりも辛いことです。いろんな出来事が重なり、入学から半年経った頃、完全に登校できなくなってしまいました。しかし、今、楽な道を選んだら、この先、嫌なことがあったとき、向き合えないかもしれないと不安に思えました。心理士さんに「誰でも足踏みすることはある。あなたはそれがちょっと早かっただけ。」と言われたことも、私の背中を押してくれました。

今でも学校に行きたくないと思う日はありますが、「夢を叶えるために頑張ろう」と自分に言い聞かせています。その中には「母に認めてもらいたい」という気持ちも含まれているのかもしれませんが。それに、自分の意志で最後まで続けることができたという経験は、自信につながると 생각합니다。留年したことや、入院した期間、自問自答を繰り返していた日々は私を成長させてくれました。「他人と過去は変えられないが、自分と未来は変えられる。」というエリック・バーンさんの言葉を信じ、これからも様々なことに挑戦していきます。

優秀賞



絆紡ぐ蕎麦

金山澤 杏朱（宮城県・高校3年）

私は子供の頃からの人見知りで友達もいない。自ら行動するなんて出来なかった。

今から2年前、実家が農家という理由で入学した農業高校。特にしたいこともなかった。ある日「蕎麦打ちしたい人は職員室に来てください」と先生からの一言に自然と職員室に足が向いた。詳細を聞くと、東日本大震災で家を失った方に蕎麦打ちボランティアを行うというものだった。「被災地の為に何かしたい」と参加を決意。この行動が私の価値観を大きく変えるとはこの時は知る由もなかった。

練習は思っていた以上に厳しく、先生から「蕎麦は生き物だ。生地を五感で感じろ」と運動部さながらの指導を受けて過ごした。当初、蕎麦打ちに参加したのは4名だったが、1カ月もしないうちに1人また1人と抜け、気が付くと私だけになっていた。練習で打った蕎麦を家族に振る舞うと「不味い」と言われ続けたが、不思議と辞めようとは思わなかった。数カ月後には指先の感覚、香り、艶、音を五感で感じることができ、生地と言葉が交わせるようになっていた。3月13日、練習の成果を出すため植松入生仮設住宅へ赴き、蕎麦100食を1人で打ち続けた。初めは私のことを受け入れてくれるか心配だったが、老若男女問わず「美味しい」と笑顔で言われ心の底から安堵した。

そんな中、1人のおばあさんが近づいてきて唐突に「私の息子は津波で死んじゃった」と話しかけてきた。続けて、津波の恐怖と失った子供への想いを語ってくれた。耳を傾けながら「被災地の為に何かしたい」と考えていた自分がどれだけ浅はかだったか気が付いた。帰り際、おばあさんは笑顔で「息子は蕎麦が好きだったから元気になったよ」と言ってくれたのに、返事することも顔を見ることも出来ず、自分の情けなさに後悔した。家族を失った方への蕎麦打ちに意味はあるのか様々な葛藤が生まれたが、この活動は最後までやり続けようと思いついた出来事だった。この日を境に毎日練習を続けた結果、今年の6月には蕎麦打ち段位2段を取得。また、今では蕎麦打ちリーダーとして後輩4名にも蕎麦打ちを教えている。新聞やテレビでも取り上げられるようになり、市役所や地元からイベントに呼ばれるようになった。

今年の3月11日、後輩と共に大震災追悼式典で400食を振る舞った。その中には、あのおばあさんの姿があり「やっぱり美味しいね」と笑顔を見せてくれた。私は思い切って「この蕎麦はお役にたっていますか？」と聞いてみた。すると「普段は部屋の外にも出ない、離れたみんなと会えるのは、あなたのおかげだよ」と言ってくれた。自分のした事に初めて意味が持てた気がして、嬉しくて涙を流しながら蕎麦を打ち続けた。この出来事は今までの迷いを全て払拭してくれた。私は蕎麦打ちしか出来ないが、それでもみんなが一瞬でも笑顔になれるなら活動を続けることができる。

来年の3月11日、高校生最後の蕎麦打ちを行うだろう。3年間続けることが出来たのは諦めないうで被災者と向き合い続けた結果だ。この活動を始める前の私は何事にも消極的、人見知りが激しく、自ら話しかけるなんてありえない性格だった。しかし、沢山のひとと接することで人への苦手意識がなくなっていた。元気を与えようと思っていたのに、いつしか、元気をもらっていたのは私だった。大震災から7年が経過し、瓦礫は片付けられ、建物が建ち、見た目は復興しているように見える。しかし、家族を失った方の心の傷は完全に治すことはできないが、癒すことはできる。今必要としているのは物資やお金ではなく、人と人が繋がる心の絆。

これから私は高校を卒業しても蕎麦打ちと被災地にはずっと携わっていきたい。いつか、心の底から笑えるその日を目指して一步一步進んでいく。



お父さん、お母さんのありがたさ

石田 明日香（宮城県・小学校4年）

わたしは、夏休みに、福島県の松原湖畔子供自然キャンプに参加しました。このキャンプで、お父さん、お母さんのありがたさを学びました。

わたしの家のりょう親はどちらも、働いていて、いそがしいのに、いつもご飯は親が作ってくれています。その間、わたしは妹と遊んだりしていました。もし、手伝ってと言われても、ことわると思います。待っていればご飯が出てくる。そのかんきょうが、当たり前だと思っていました。このキャンプで、野外すいはんをしました。家でカレーを作る時は、たまに手伝っています。

でもわたしは、まだ、ほうちょうがこわいし、めんどくさいから、という理由で、あまり手伝っていません。なので、キャンプの野外すいはんで、カレーを作った時は、自分がいつも、どのくらい手伝っていなかったのかが、分かりました。わたしは、料理はできないし、せんたくも、少ししかできません。それなのに、妹とけんかをし、親をこまらせることがあります。やるべきことをやらずに、遊んでいると、母や父に注意されます。注意されている時は、わたしは心の中で、なんでおこるの。今からやろうとしていたのに。と思ってしまう時があります。でも、本当は全部わたしのために、言ってくれているのに、いつも親のせいにしてしまいます。でも、起きると、いつも親がいて、それなのに、キャンプに来て親がいなくて、さみしくて、いま、何をしているかを考えたり、お母さん、お父さんに、会いたかったり、そういう気持ちでいっぱいになりました。いつも作ってもらっている食事も、野菜を切ったり、あらったりして、いそがしいはずなのに、今まで全然手伝っていなかったの、これからは、時間があったら積極的に手伝おうと思いました。なので、これからは、お母さん、お父さんのことを大切に、なにかやくに立つことをして、少しでも、らくをしてほしいと思いました。

この気持ちに気づかせてくれた、このキャンプには、本当にかんしゃしています。このキャンプを通じて、色々な県の友達が出ました。その中でも、1番仲良くなった子と、文通を続けています。来年も、仲良くなった子と会えるのを、楽しみにしています。





夢のあの大会

竹田 南湖（埼玉県・小学校 6 年）

目指すは、県大会。私が所属しているバスケのチームでは、日々目標に向かって頑張っています。火曜日・金曜日、そして土日の練習で、失敗を重ねながら色々なことにチャレンジし、「出来るようになりたい」「勝ちたい。」という気持ちを胸に練習に励んでいます。

県大会出場への第1歩。予選では、試合終了を告げるブザービーターを直前にあと2秒。点数は、同点。そんなピンチな時に自分がシュートファールをもらい展開はドキドキのフリースローへ。プレッシャーのあまり、いつもはすんなり入るフリースローも1本目は外してしまいました。会場の盛り上がりも急上昇。「全ては自分のフリースローにかかっている。」そう思うだけでドキドキが止まりませんでした。「フー」ため息と同時に手を離し、2本目は、すっぱり決まりとても嬉しかったです。結果は、1点差で勝利し1番と言っても良いくらいの最高の試合となったのです。

その試合から約3週間の月日がたちました。今回は、1番大事な決戦の日。勝ったら県大会出場、負けたらそこで終了。その相手は、今まで2回程試合をやっているけれど1度も勝ったことのない相手でした。

コーチからは、「コートに立っている5人でなく、10人で戦え」という指示が出ました。「10人全員得点」を目標とし「3度目の正直」「絶対勝ってやる」と一発気をいれました。いよいよ第1Qです。第1Qでできるだけ点差をつけて第2Qにつなぎたい。そう思うばかりでした。6分しか試合に出ることが出来ない仲間がチームを支えてくれました。そして第1Qが終了。20対8。リードは私たちの方です。観客からもたくさんの拍手が送られてきて、すごく元気が出ました。そして、第2Qも守り切ってくれました。あとは、ベストメンバーにかかってきます。「この貯金を有効に使うぞ」こんな意気込みが心の中から聞こえてきました。点差が3点にまで縮まった時もあったけれどなんとか勝利の栄光をつかみ取れました。そして、県大会出場へのキップも。

これは10人全員で戦えたからだと思っています。1人の力だけでは、絶対に勝てません。協力し合ってこそ1つのチームなのです。そして、「3度目の正直」この言葉も私たちを救ってくれたのかもしれない。県大会出場のチームではなく県大会で勝ち切れるチームを目標にし、今も100%の力を出し切って練習を続けています。



はじめての役割

鍵本 百伽（広島県・小学校 6 年）

この、SYD キャンプは、今回をふくめて、6 回目の参加です。これまでいろんな、村長を見てきました。やさしくて、人一倍努力している村長や、声かけをしている村長、わたしはそんな村長を見て、自分もいつかあんな村長になりたいと思い、今年やっと、やっと念願かなって初めて村長がやってきました。はじめは、村長はみんなをまとめるだけが村長の仕事だと思っていましたが、わたしは村長になってはじめてきづきました。「村長はまとめるだけでなく、みんなにしじを出し、かげで努力することが本当の村長なんだ。」それに気づいたわたしは、すぐにそのことを実行してみました。みんなに、「いまから顔あらうから、タオルもっていこう。」とか、「はみがきをするよ。」とかはじめの日以上に声かけをしました。声かけをするとみんなちゃんと動いてくれました。助役の人も、がんばってくれてすごく助かりました。でも、2 日 3 日ぐらいになるとみんなに、「はみがきにいくよ。」と声をかけても、友だちとの話にむちゅうで、いこうとしてくれませんでした。そんなとき、ベテラン村長の友だちに、どうすればいいかききました。その友だちは、「1 回、2 回、3 回言っても聞いてくれないときは、大きな声で言えばいいよ。」と言ってくれました。その考えはけっこう、効果的でした。そのあと何日か、過ごしたのですが、後悔したことが 2 つあります。1 つは、夜のテントの中のことです。村長なのに、注意をあまりせず、夜中までずっとしゃべって起きていたことです。今も、後悔していて、来年からは「もうねよう。」とか、「今はおきていい時間ではないよ。」とか自分から声をかけようと思いました。もう 1 つは、みんなに少しおこってしまったことです。みんなが少しうるさくて、小さなことだったのに少しきつくおこってしまいました。わたしは、きつくおこらず、「もう少し小さい声で話そう。」と、やさしく声をかけ、村長としてのじかくをもう少しもてばよかったなど後悔しています。わたしは、3 日目の最後や 4 日目ぐらいに、やっと村長らしい村長になれたかなと思います。6 年前にあこがれをもった村長に今、なれてうれしかったし、不安もありましたが、リーダーや友だち、助役さんたちの力もあり、今のわたらしい村長があるんだと思います。来年も参加し、もしまた村長になることができたなら、今回の経験を生かし、困っている村長がいたら、自分が経験してきた事を伝えてこの SYD キャンプをもっとつないで、こんにちは！というふれあいの種、どうぞ！という思いやりの種、ありがとう！というよろこびの種でいっぱいにしていきたいです。

きらめき賞



その一步

清川 雅貴（群馬県・中学校3年）

「助けて」の叫び声で、僕は家を飛び出した。線路の中に2人、人がいた。踏切のベルが鳴っていた。「助けなくては。」そんなことを思う間もなく身体が動いた。近くの踏切の緊急停止ボタンまで無我夢中で走った。幸い電車は止まり、2人は轢かれなかった。

中学2年の夏、僕は初めて人の命を救った。僕は元々あと1歩のところまで周囲の視線を気にしてしまい、行動に移せない人間だ。普段は積極的であろうとふるまいながらも、肝心なところでは周囲を気にしてばかりの自分にどこかもどかしさを感じていた。どんなことにも動じず堂々としている。そんな人間に憧れを抱いていた時、あの出来事が起きた。

人助けをしたことで、変わったことがある。まず、思い切って行動できるようになったことだ。僕は英語が得意だ。しかし、それを生かしきれていなかった。会話となると、発音や語彙力など、周囲の評価が気になっていたためだ。例えば、近くに困っている外国の方がいたとしても、「伝わらないのではないか」と怖気づいてしまい、声をかけることが出来なかった。しかし、あの出来事があってからは、自分の行動に自信を持つことができ、周りの評価が以前ほど気にならなくなった。そしてつい先日、外国の方を見かけた時に、自分から、「May I help you?」と聞くことが出来た。自分の特技を自然と人前で使うことが出来た。

さらに、人助けをしたことで、僕は自分の行動に誇りを持てるようになった。事件直後、僕は“2人とも助かり良かった”くらいにしか思っていなかった。しかし、その考え方が変わるきっかけがあった。それは、事件が経ってから1カ月位した時のことだ。人命救助をしたことについて表彰される機会があった。そこで僕は警察やJRの方々から表彰状をもらった。もちろん表彰されたことは嬉しかったが、更に嬉しかったことがあった。それは、JRの方に「あともう少しボタンを押すのが遅かったら2人は助かっていなかった。本当に有り難う。」と言われたことだ。正直、大層な考えがあつての行動ではなかったので面食らった。しかし、自分の行動を「感謝」という言葉や形に表れたことで、“人の命を救う”とても名誉なことを実行できた自分を誇りに思えるようになった。

何事も、1つの「キッカケ」によって大きく自分の行動、更には自分の生き方すらも変わる。あの出来事がなければ、僕は何も変わっていなかっただろう。しかし、あと1歩のところを踏み出せたことで、僕の世界は変わった。僕は去年の経験から、「無我夢中で行動することの大切さ」に気が付いた。今、夢中になれるものなど何もないと思う者がいるかもしれない。しかし、僕は那些人にこそ、伝えたいメッセージがある。『『キッカケ』は何だっていい。1歩前に踏み出せば物事に対して真剣に取り組むことが出来る。』と。

1度でも感情より先に体を動かせば、物事への見方が変わるはずだ。僕の場合はあの非常に貴重な経験が出来たことで、自分の未来が、生き方が変わったと感じた。人生は短いようでとても長い。1人ひとりの人生は、それぞれ違い、当然数多くの苦難が待ち受けている。僕も例外なく、この先の人生には、大学受験や就職活動、その先にも多くの苦難が待ち受けているだろう。おそらく、踏み出すことにかなりの勇気が必要とする事があるはずだ。しかし、僕は勇気が必要な「その1歩」を踏み出し続けていこうと思う。そして、胸を張って生き、自分の人生を切り拓いていきたい。



自分が体験したこと

橋本 開（島根県・高校1年）

僕は、赤ちゃんだった頃に、水頭症を患いました。僕が水頭症だと知った両親や祖母はとても泣いたそうです。3年間入退院を繰り返し、治療しました。病院には、両親だけでなく、親戚もたくさんお見舞いに来てくれたそうです。入院中は、4回手術を受けました。僕の頭の中には、黒い水風船のようなものが入っていました。黒い水風船のようなものは、手術で無事摘出されましたが、術後、体温が39度から下がらず、上半身にチューブをたくさん通されました。体力のない赤ちゃんにとって、高い体温はとても苦しいことだそうで、家族は非常に心配したと聞きました。なかなか体温が下がらないので、医師の判断でチューブを外した結果、1週間後、体温が下がり始め、命が助かりました。覚えていない部分も多いのですが、僕の人生の中でとても大きな体験だったと思います。

今では健康なのですが、手術をしたため頭が少しへこんでいます。僕がそのへこみに気づいたのは、幼稚園の年長くらいの頃でした。「なぜへこんでいるのだろう」と不思議に思っていました。頭の病気について知らされたのは、小学生になってすぐの頃でした。親から説明され、とても驚きました。

小学2年生の頃、頭のへこみのせいでいじめにあいました。そのショックで、何度も死にたいと思いました。でも仲の良い友達が「死んでも何も良いことないよ」と言ってくれたことで、なんとか思いとどまりました。その後は、あまりへこみが気にならなくなりました。

高校生になり、新しい友達がたくさん増えた時、頭のへこみのことを言うか言わないか迷いました。正直に話して距離を置かれたり、引かれたりするのいやだけれど、言わずにいて頭のへこみに気付かれた時、驚かれたり、嫌われたりすることも怖くて、どうしようかと悩んでいました。しかし、今後のことを考えたとき、自分の口で、きちんと話すことが1番良いのではないかと考え、打ち明けました。今のところ、仲のいい一部の友人しか知りませんが、打ち明けた友人たちは、すんなりと受け入れてくれました。とても安心しました。また、去年の10月に参加した、SYDの全国青年ボランティア・フォーラムで、水頭症について発表した際、同じ高校から一緒に参加していた友達も、その発表を聞いていました。発表を聞いて、どのように思ったのだろうと心配でした。しかし、発表後、友達に「話してくれてありがとう」と言ってもらえてほっとしました。人に話すことは勇気がいるけれど、思い切って話したことで、以前よりも良い関係が築けているような気がします。これからも、自分からは少しずつ、打ち明けていきたいと思っています。

この先の人生の中で、苦しいことや辛いことがたくさんあると思います。しかし、お医者さんや家族に守ってもらった命を大切に、自分自身の力で乗り越えていけるように頑張りたいと思います。



幸せを感じることに

野口 翔太（北海道・高校2年）

私は、経済的に貧しいわけでもなく、教育も厳しくなく、家族間の軋轢もない、幸せな家庭に生まれました。一方で、私の12歳年上の兄と9歳年上の姉は少なくとも私より苦労を重ねています。私の幼少期に父の会社が倒産し、経済面が苦しくなり、思うように生活できない期間が続きました。そんな中でも兄と姉は幼い私の世話をしたり、欲しいものを我慢したり、そして仕事の忙しい父と会うこともできなかつたり、過酷な暮らしを強いられていました。

そんな過去があったとも知らず、私は成長していき、中学生になりました。中学時代はバスケットボール部に所属していて、今でも人生の転機といえるほどの尊い経験を積み、精神力を養いました。それと同時に考え方も大きく変わり、利他主義を目標に掲げたり、しばしば幸せを感じたりするようになっていきました。

今に近い考え方が形成されていった頃、中学3年生の秋に、父が肺がんで入院することになりました。既に仕事もできなくなり、ホームヘルパーに手伝ってもらって生活を送っていたので、特に驚きや悲しみというのはありませんでした。父が家からいなくなったことに気持ちの大きな変動はなく、いつも通り幸せに過ごしていました。

それからしばらくして、10月18日、父は危篤状態になりました。その病院の看護師である母はすぐに駆けつけ、ほとんど声も出せない父に何時間と話しかけました。そのとき母は「10月9日は私の誕生日で、1月19日があなたの誕生日だから、組み合わせた10月19日に死のうね。」という旨を伝えると死に際だったはずの父がみるみる回復し、10月18日から無事に日付をこえて19日になりました。「もう19日になったから死んでもいいよ」と母が言うと、それを聞いて安心したのか、父はゆっくり息を引き取りました。

この時私は、死ぬ間際の人間はすごいなと思いました。そして幸せを感じました。予定していた日に家族全員に見守られながら他界できたこと、父の偉大さに気づけたこと、呼吸が止まる瞬間に母が笑っていたこと、死という後ろ向きのイメージが強い事象にも当時の私は前向きとしてしか考えていませんでした。感情が薄いと言われればそれまでですが、父の最期はとても綺麗でした。

その日私は、自分が幼い時、会社が倒産して貧乏になったことや兄姉が世話をかけてくれたことを母から聞きました。考えてみれば父とよく遊んでいたことや、一緒に買い物をしたこと、毎日会えたこと、すべて恵まれていたように思います。恵まれすぎて怒られることもなかったからこそ中学の部活での指導は自分を大きく変えてくれたのかもしれないとも思いました。

こういった経験から学べることは、身近な幸せを感じるということです。家庭での経済環境が整っていたり、自分の好きなことができたりということも一種の幸せですし、友達ができた、よく眠れた、良い天気だといったことも幸せです。こうした身近な幸せが感じられるようになれば、人に感謝を表現できるようになると思います。自分を不幸だと思っている人間は人に感謝できていません。人に感謝できていない人間は人に感謝されません。だからこそ、幸せを見失いがちな時でも身近な幸せを感じるということを忘れないでいてほしいと思います。

私はいま、幸せです。

きらめき賞



1人じゃない

毛利 真尋（富山県・高校2年）

15歳の春、私の毎日は腐敗していた。朝起きなければならない時間に起きられない。その理由はいくつ時間前まで友人と遊んでいたからだ。頑張れるものがなかった。努力しなくても日々がだらだらと過ぎて、何の目的も目標もない人生だった。そしてそれを誰かの何かのせいにした。親がうざい、先生の指導に納得がいかない、学校はつまらない場所だ。イライラして人に当たった。最低の自分から抜け出すことが出来ず負の渦の中にいた。

高校も辞めようか迷いながらも2年になり、嫌々行っていた学校だが、クラスには自分を含め退学ギリギリの人や問題児がたくさんいた。

それを担任は誰1人として見捨てる事も何度も向き合ってくれ教えてくれました。

これまでの自分を振り返り、恥ずかしくなった。こうやって自分のために必死になってくれる人たちのことを尊敬した。そして疑問に思った。私は誰かのために何かをし、役に立つ存在になれるだろうか。その疑問は希望に変わった。恩返しをしたい。何の希望も見いだせなかった自分を大切に、一緒にやろうと言ってくれたクラスの仲間や、日々の自分の言動に丁寧に向き合い指導してくれた担任が私に光を与えてくれたように、私も誰かのために何かをしたい。今度は自分の番だ。そんな思いが芽生えた。

人の役に立ったことのない私が、安易に思いついたのがボランティア活動だった。1つ目は県内の少年自然の家で小学生を指導するというボランティアだった。2つ目はカンボジアでの8日間子どもたちに運動の仕方を教えたり、遊具を一緒に作るという内容のものだった。

3つ目はフィリピンの小学校に訪問し支援物資を直接渡すことや、現地の人々との交流、マザーテレサの家への訪問。楽しかったこともあれば現実を受け止めるのが辛かったこともありました。

同じ日本で地元の子供たちをサポートするのと、発展途上国のこどもたちを支えるのは、その環境や状況、サポートの対象、活動内容など全く違う。しかし、ボランティアそのもののダイナミズムとしては同じだった。何の特技もない自分が何かを任される。こんなことやったことない、とか、やりたくない、などと逃げ腰でもたついている暇はない。その現場に入った瞬間、私は頼られる存在になる。そして頼ってくれている人が私にかけてくれる期待がじんわり温かく血肉に浸透した。頼ってくれている相手をがっかりさせてはいけない、もっと自分にできることはないかと自ら模索し始め、責任感と使命感が湧いてくる。

当初は誰かのために何かをしたいという安易な考えから参加したボランティア活動だったが、今の私は、ボランティアによって自分を見つめ直す作業をさせてもらっている。たくさんの人と出会い、自分の得意不得意を実感し、失敗から逃げ出してしまうような自分と闘いとことん向き合う。「人の役に立つ」は、まだまだ先なのではないかと思う。ボランティアが私にもたらしてくれるものを知ってしまった以上、今後さらに多くのボランティア活動を通して自分自身を探索し、私を支えてくれる人たちに感謝の意を表し、また自らを高めていくのが使命であると考えている。

この目で見えてきた事を多くの人に伝え1人でも多くの人の協力を得ようとスタディーツアーに参加した仲間達と9月から学校で募金活動を始めました。1人でも多くの子供達を笑顔にするためです。若い時期に世界観れた事は私にとって大きな財産となり、夢への大きな壁や現実を見せてくれたと思います。

フィリピンに行った仲間達やボランティアを通して知り合った人々とこれからも互いに協力し私ができる精一杯のボランティアをしていきたいと思います。

これが私の将来の夢です。



生きていく上での強さ

鈴木 証（東京都・大学3年）

私は、今年夏にフィリピンの貧しい子供達を支援するボランティアに参加しました。私はフィリピンという国には、漠然と貧困のイメージがあるだけで、東南アジアの発展途上国という以外何の知識も持っていませんでした。ただ海外に行って支援をするという活動に興味があっただけで、行く場所がどこであろう良かったのです。しかし、実際にフィリピンに行き、身をもって体感したことによって私の認識はガラリと変化しました。飛行機から見下ろして目に飛び込んできたのは、輝くビル群でした。空から見たフィリピンの景色は東京と遜色無いくらい美しいものでした。しかしながら2日目のバス移動でのこと、都心から少し移動すると、すぐにバラック小屋が立ち並ぶ光景が見えてきました。そして早くも、(水上生活者が暮らす地域)へ辿り着いたのです。そこには、「大量のゴミで、汚く濁った河を泳ぐ」子供達の姿がありました。高層ビルが居並ぶ、首都マニラの姿がある一方で、都心からすぐの場所に、劣悪な環境で過ごす貧しい人々がいる。この事実を鋭く突き付けられ、この国の深刻な「貧富の差の問題」を意識せずにはいられませんでした。

3日目に行ったゴミ収容所の中のハッピーランドという場所では、多くの人々が火事によって住むところを失い、狭い避難所にひしめき合って生活していました。見ると住居は粗末で衛生環境も劣悪で、火事があればたちまち延焼してしまうような場所でした。そのような危険な場所でも、ゴミを拾ってジャンクショップに売ることによって生計を立てる人々は、たくましく生きているようでした。とは言え皆満足に食べることも出来ず、着るものも充分でないために一様に疲れていて、見ていると本当に気の毒で、胸がざわつくような感覚でいっぱいになりました。

それでもフィリピンに来てすぐに気付いたことがあります。それは、フィリピンの人々がとても温かい人達であるということです。私たちは今回ボランティアという形で参加させていただきましたが、支援する場所のセッティングやスモークーマウンテンを訪問するときの手続き等、様々な場所で沢山の現地の方々がサポートしてくれました。まさしく彼らは陽気でした。現地で私たちが挨拶すると、殆どの方が笑顔で手を振り返してくれました。仕事の人や、体を重そうにして寝ている老人、上半身裸の子供も皆温かい笑顔で迎えてくれました。ただの挨拶だけれども、あれ程までに豊かな気持ちになれるのは、その中に彼らの純粋な親しみの気持ちが込められているからではないかと思えます。人と人が交流することで得られる心の豊かさが確かにあるのだと、そう感じる事ができました。

日本という国は、経済力のある豊かな国で、物が不足することはなく、今回訪れたフィリピンの人々と比べれば何倍も恵まれている国と言えるでしょう。しかし一方で幸福度が低く、また自殺者が多く、人身事故で電車が止まることが日常のようになってしまっているという悲しい事実があります。今回私は、その日暮らして、食べる事にも事欠く人達を見てきました。彼らは確かに貧しい。しかし劣悪な環境の中でも、その日1日を精一杯生き、陽気で、しかも人を思いやる事を忘れないフィリピンの人たちは、何よりも豊かな心を持っていると感じました。

私はどちらかというと英語が苦手なフィリピンの人たちとコミュニケーションを取ることにかなり不安がありました。この英語力でどうやって会話を成り立たせればいいのか、相手の言うことをどうやって理解すればいいのか。また異国の地ということで緊張感もありました。生まれて初めて見るゴミの山、そして異臭……そんな中でニコニコとしている子供達に対する驚きと戸惑い……

でもそんな私の気持ちをほぐしてくれたのは、思い切ってホームステイしたホストファミリーのAJ一家でした。AJ一家は3畳1間ほどの3人暮らしの貧しい母子家庭であり、壮絶な過去をもつゴミを売って生計を立てていた元スカベンジャーです。にも拘らず、豊かな国から来た私に対してお母さんの手作り料理という最高のもてなしと、家族みんなが愛情をもって接してくれ、緊張する私からたくさんの笑顔を引き出そうとしてくれました。そしてなによりも衝撃だったのは、AJにはそんな過去があったという影がみじんも感じられず、あまりにも明るくて優しく、いいヤツだったということです。

私は日本に帰ってこう考えました。経済力や権力も、確かに人が生きていくうえで不可欠な物です。しかし、あのフィリピン人々の「貧しくても温かい」という心の豊かさは、人として生きていく上での強さであるのではないかと思います。フィリピンの人たちが私に与えてくれた以上の物を私は直接彼らに返すことは出来ないかもしれませんが、けれども彼らの強さと優しさを私自身がこれからの人生でしっかりと身に着け、まわりの人たちに交流し広げていくこと、これこそが出会った人々に対する本当の恩返しだと思えるようになった、今回の経験でした。



存在する理由

後迫 春香（大阪府・大学4年）

「わたしはこの場所で何が出来るんだろう」

自分の存在意義は何なのか。ずっと考え続けてきた1年半だった。頭に響くこの問いに対する明確な答えはまだ見つからないけれど、それでも今は、この場所はわたしの居場所のひとつだと胸を張って言える気がしている。

作業療法を学ぶため、大学に進学して2年。もうすぐ3年生になろうかという頃だった。同じ専攻で勉強する同期から、大阪府立大学ボランティア・市民活動センター「V-station」の学生スタッフをやらなかと誘われたのだ。「もう3年生になるのに、今さら新しいこと？」……元来引っ込み思案なわたしである。迷いがなかったわけではなかった。しかし一方で、何か新しい経験をしたいと考えていた当時のわたしには、それはとても魅力的な誘いを感じられたことを記憶している。

入ってからの活動は初めて体験することばかりで、とても刺激的だった。週1回はスタッフ会議のために集まり、今後の運営や企画についての話し合いをする。初めてボランティアをする学生のフォローのため、実際のボランティア活動に同行することも多い。そして入って4か月の頃には、関西のボラセン学生スタッフの集まりで、1人でプレゼンテーションを行う機会もあった。他の大学はベテランスタッフが発表しているなかで、新人のわたしはとても緊張したことを覚えている。

しかしわたしは、そんな充実した日々の中でも、常に冒頭に述べたような不安に駆られていた。自分と同時期に入った後輩たちがどんどん馴染んでいく中で、病院実習もあり思うように時間の取れない自分がどのように組織に貢献していけるのかが見出だせず、どうしても自信が持てなかったのだ。人前に立つことも、会議で意見を言うことも得意ではない自分は、ただの役立たずなのではないかとも感じてしまっていた。

そんなわたしがほんの少しの自信を持てるようになったきっかけは、劇的な何かではなかったように思う。それはきっと、学生スタッフとして日々を過ごすなかで同期や後輩がくれた、たくさんの言葉だった。

「おはるさんの書く文章、好きやで」

「会議のとき、うまいことみんなの言いたいこと要約してくれる」

「他の子に相談したときは、その子らしいなって答えが返ってくる。おはるさんに相談したときは、自分が求めている答えを返そうとしてくれる」

「おはるがおったら、とりあえず失敗はしないよね」

「わたし、おはるさんみたいになりたいです」

引っ込み思案で、人前に立つのも、人と打ち解けるのも、会議で発言するのも苦手なわたしだけれど、認めてくれる人がいる。それはわたしにとって、この上なくしあわせで、この上なく力になる「存在する理由」だった。時間をかけて、V-stationはかけがえのないわたしの居場所になっていった。

もうすぐわたしは大学を卒業し、社会に出ていく。そこではまたイチからのスタートだ。はじめはきっと、先輩方の足手まといになることも多いだろう。けれど、わたしはもう、自分の存在意義に不安を感じたりはしない。だって、みんながくれたたくさんの言葉が、わたしの「存在する理由」だから。

みんなが認めてくれた「わたし」を最大限発揮できるよう、新しい場所でも、わたし精一杯頑張るよ。



教師として働く中で

錦織 愛里（島根県・社会人）

私は現在、社会人6年目であり、教員6年目です。仕事の性質上、毎年多くの出会いと別れを経験します。別れの中には、嬉しい別れと悲しい別れがあります。嬉しい別れは、生徒が卒業する時。もちろん、別れが寂しい気持ちもありますが、それを超える感動や喜びがあります。3年間持ちあがった生徒たちを送り出した卒業式の記憶は、今でも強く私の心に残っています。それまでの苦労が全て消え去るくらい、幸せで素敵な時間でした。教員生活6年間で、1番の宝です。

一方で、高校生活の途中で去っていく生徒との悲しい別れがあるのも事実です。私がはじめて担任をしたのは、教員2年目のことでした。元気な1年生39人のクラスでした。そのクラスの中に、ある男子生徒がいました。彼はいつも気だるげで、授業中に寝ることも多く、提出物を期限通りに出したり、学校の規則を守ったりすることが苦手な生徒でした。学校生活の中では、投げやりな態度をとることの多かった彼ですが、子どもが好きで、情に厚く、将来は保育士になりたいという夢を持っていました。彼の夢を応援する反面、なかなか態度が改善されないところに対し、いら立つことや、どうしたら良いのだろうかと思悩むことが多くありました。そのせいで、彼の抱える本当の思いに、目を向け理解することが疎かになってしまっていました。今振り返ってみると、当時の自分が人として非常に未熟だったこと、はじめての担任で気が張っていたこと、そして学級経営に対し、高すぎる理想を抱いていたことなど、至らなかった部分がたくさん見えてくるのですが、当時の私はなかなかそれに気付かず、苦しい思いをしました。そして何より、彼を苦しめていたと思います。とても申し訳ないことをしたと思っています。

結局、彼は1年生が終わる時に、学校を辞めました。進級に必要な単位を修得できなかったからです。会議により彼が進級できないと決まった時、自身の至らなさを痛感しました。彼に対し、もっとできることがあったのではないだろうか、もっと彼に寄り添えていたら...同じ考えが何度も頭の中を駆け巡りました。それと同時に、担任として生徒と関わることの責任の重さにも気付かされました。やり直せるならやり直したい、後悔ばかりの1年間でした。この思いはきっと一生消えません。

現在、私はまた1年生の担任をしています。彼との出会い、別れは、教員としての今の私に非常に大きな影響を与えました。相手をありのまま受け入れること、そして理解すること。理解した上で、相手を進むべき道へと導くこと。教育に携わっていく上で当たり前のことではありますが、身をもってその大切さに気付くことができました。6年目になった今でも、上手いかず悩んだり、苦しんだり、反省したりすることの多い日々です。しかし、時折蘇るあの1年間の苦い思いを胸に、立ち止まることなく、目の前の生徒たちと向き合って、毎日を過ごしていきたいと思っています。